

過去から学ぶ【第2回】海旅業界関西シニア会に聞く！ 海外旅行自由化 40周年企画— 40年前の海外旅行業界とは

先月からスタートした40年前の海外旅行の実態を関西シニア会会員のリレー方式で振り返るこのコーナー。今回は前回に引き続き会長の恒松氏にご登場いただき、海外旅行自由化前後の業務内容や、ご自身の海外旅行初体験を振り返って頂いた。（編集部）

競争熾烈な中での海外旅行ビジネス

1960年頃を一言で表現すれば、戦後から続く海外旅行鎖国時代であったと言えるだろう。日本の国力は絶対的に弱く、外貨が不足。外貨は貴重であり、海外へ行けるのは限られた一部の人達のみであった。このような背景から、国を挙げて輸出振興策が計られる時代であった。

この時代、輸出入に実績がある会社、即ち貿易商社や輸出品メーカーなどには、輸出の実績に応じて優先外貨が割り当てられた。従って、これらの会社（大手・零細を問わず）や日本生産性本部などをはじめとする団体などが当時の海外旅行業界のターゲットであった。

入社当時の私は、多くの大手輸出入関連

日本経済のトップの人達を間近に

その頃、もう一方で私の担当していたマーケットに日本生産性本部（編集部注：1994年4月に日本生産性本部と社会経済国民会議の統合。現在は社会経済生産性本部）派遣のアメリカ視察団（後日欧州視察団も編成）があった。もちろん獲得競争は激烈。担当者との信頼関係を築き上げるのに努力した。当時の日本生産性本部はアメリカ商務省と協力し、産業分野での先進国の米国へ日本の産業の振興育成を目的に各産業

現地情報は輸入書で猛勉強

日本生産性本部が組織する視察団は、数ヶ月の間に日本で勉強会を頻繁に行って出発する。ただし、視察旅行そのものは、スケジュールからホテルに至るまで旅行者の出番はほとんど無い。アメリカ側と日本生産性本部との打ち合わせですべてが決まっていたからだ。

旅行者の本領を発揮できる場面は、解散後に予定される参加者個人のスケジュール作成だ。視察団の旅行は35日間。これ以降の延長はヨーロッパ等を周遊することを理由に、15日間は渡航審査の承認を得やすかったと記憶する。

こうした旅行の対応は、後々にまで良い勉

会社を担当した。渡航者の絶対数が少ない中で、一人のお客様を巡り多くの旅行会社が押し寄せ、競争は熾烈であった。渡航係担当者のデスクに常時、張り付くといったこともしばしば。担当者との緊密な関係を作り上げ、維持することも仕事のうちで、接待も頻度多く行った。

また、緊密な関係を作り上げるということでは、担当者が自宅を引越しする時などはひとつのチャンス。率先して手伝いを引き受けたものだ。担当者の親類が地方から上京された時は、東京タワーから銀座、浅草、新宿など東京案内を引き受けることもあった。つまり、他社の抜け駆けを競ったのだ。

分野を中心に視察団を編成・派遣していた。上は日本を代表する財界人や大企業のエグゼクティブで構成するトップ視察団、また中小企業の連合会単位のものまで数多くの視察団が出発していった。

中でも、トップ視察団の担当の折には、当時の経済界トップクラスの方々が入社間もない私にとっては雲の上の存在であったが、身近に垣間見ることができた。他業種に就職した仲間からは大いに羨ましがられた。

強となった。解散後の旅程やホテルについてもアドバイスを求められることも多かった。例えば、ホテルの選択、空港とホテル間の交通手段、お土産を購入する場所、観光地。列車から船までとあらゆることに精通しなければならなかった。

英語のガイドブック（ミシュランなど）や輸入地図を購入、勉強したことは鮮明な記憶として残る。現在の様に、海外案内のビデオテープは無く、テレビで外国の事情を多頻度に流す時代でもなかった。しかし顧客への説明には、欧州渡航歴が数度に及ぶような顔をして、応対や説明をした。「講師師見てきたような嘘を言い」との言葉があるが、この

場合、嘘は方便であり、かつ有益であった。また必要悪でもあった。

学んだ知識や対応法が役立つこととなるのは、後年、ヨーロッパへ初添乗したとき。あ

人生教訓を教えていただく

生産性本部担当当時の思い出の一つに、社団法人日本工業倶楽部（編集部注：経済団体連合会、日本経営者団体連盟など職能的な経済団体の設立、育成に協力）で活躍する山根銀一氏にいろいろ教えていただいたことである。山根氏はトップセミナーの視察団の解散後、ヨーロッパから「子供の頃からの憧れの的であったクイーンエリザベスII世号に乗船したい」と言われた。これをきっかけに、船旅の魅力を熱心に教え

初の海外旅行の記憶

私の海外旅行初体験は、入社から2年ほど経つ1962年（昭和37年）7月18日から7月29日まで12日間のレバノン、ヨルダン、キプロス島の招待旅行であった。当時、世界一周路線を持つパンアメリカン航空の寄港地に新たにサイゴンが加わったことを記念したものだ。バイルートでの解散後は、一人でニューデリー、バンコク、香港と旅行。帰国したのは結局、8月2日で全16日間の旅行であった。

当時のパンナムの招待旅行は豪華。全員がファーストクラス、食事やホテル、観光と全てがオールギャランティーであった。日本から持ち出しを許された外貨はわずか100ドル。一人でニューデリーなど、パンアメリカンの路線を旅行し、3日間延長のホテル代、食事代、交通費、お土産も含めて100ドルで賄った。1ドル360円の時代のこととはいえ、100ドルの値打ちが高かったことは改めて感じる。

旅行において最も印象に残る土地はバイルートだ。中近東のオアシスと呼ばれ、カジノ、紺碧の地中海に面したレストラン「シンドバッド」、セクシーなベリーダンスを鑑賞するエキゾチックな土地であった。朝起きると

る経済視察団にベテラン添乗員として紹介されたことから、内心は冷や汗ものであったが、初添乗が暴露せず、かえってベテランぶりにオーガナイザーから感謝された時だ。

ていただいた。また、お会いする度に、丸の内の重厚感あふれる倶楽部でご馳走に預かりながら、人生のあり方について教えて頂いた。今でも、山根氏が良くおっしゃった「聞き上手になりなさい」と言う言葉を覚えており、実行している。ビジネス書のたぐいも無い時期に、通常ではお目にかかれぬ財界トップの方から直接お話を伺うことが出来た当時の私は望外の幸せであった。

尖塔からコーランの読経の声が響いてくる。まるで、アラビアンナイトの世界と思えるほど街は平和そのものであった。

また、バイルートの山奥にあるパールベックは遺跡観光として魅力的な素材であった。夜には、遺跡で演奏される野外音楽会を催す。このほか、この旅行でエルサレム、ベツレヘム、死海、聖墳墓教会、ゲッセマネーの園、ジェリコ等の聖書ゆかりの地を実地に見ることが出来たことは貴重な体験であった。

しかし、この旅行から中東紛争の火種を垣間見る一幕もあった。ヨルダン側からイスラエル領を望見したときのことだが、ヨルダンとイスラエルの間には国連による緩衝地帯が設けてある。その先は白く塗りつぶしてある。同行したツアーリスト・ボリスに聞くと、「そこは国など何も無い。聞かないでくれ」という。そこに民族間の根強い宗教的・歴史的对立が見えた。

後に、バイルートは戦火に巻き込まれ、宿泊したフェニシア・ホテルも被害を受けたとのニュース報道。美しかった平和の街が破壊されたことは、いまだに残念でならない。



恒松一郎氏（つねまつ・いちろう）

生年月日：1933年10月29日

現在：海旅業界関西シニア会会長

略歴：1960年 京阪神急行株式会社（現阪急電鉄株式会社）入社、航空船舶代理店部東京支店勤務／1961年 株式会社阪急交通社が分離独立移籍／1972年 同社海外旅行ホールセール商品の製作販売 グリーニングツアー部長を経て／1992年 同社取締役グリーニングツアー部営業本部長／1996年 同社経営政策担当常務取締役／1997年～1999年 株式会社阪急トラベルサポート代表取締役社長／1999年～2001年 同社取締役相談役／2001年～海旅業界関西シニア会第5代会長

海旅業界関西シニア会とは？

関西地区で海外旅行関連業界（旅行会社、航空会社、ホテルなど）に20年以上勤務した50歳以上の現役、OBで構成する任意の親睦団体で1990年の発足。現在約180名の会員が登録されており、業界の現役とOBの比率は4対6となっている。共通の趣味やテーマを通じて活発な活動を続けている。URL：<http://www.class-e-jp.com/senior/kai/>